

P-433 サイトメガロウイルス胎内感染症に続発したウイルス関連性血球貪食症候群 (VAHS) の一例鹿児島市立病院周産期医療センター¹, 鹿児島大², 宮崎医大³丸山有子¹, 茨 聡¹, 佐々木泰¹, 加藤英二¹, 鹿島理恵¹, 榮鶴義人², 中西直美², 小林康佑¹, 米田 哲¹, 住田由美¹, 池ノ上克³

妊婦のサイトメガロウイルス (CMV) 抗体保有率の低下に伴い, CMV 胎内感染症児の増加が懸念され, なんらかの産科的アプローチが模索されているが, 予防法はもちろん, 出生前診断法も確立していない. また, ガンシクロビル (gan) による新生児治療が可能となったものの救命できない例も多く, その病態生理の理解は十分でないと思われる. 今回, 我々は, gan により緩解中に病状が急変し死亡した症例を経験したので報告する. **妊娠経過:** 母親は30才の2回経産婦で, 22週に感冒様症状がみられていた. 32週1日, 妊娠中毒症の診断で前医に入院後, 胎動減少, 胎児心拍モニタリング上 loss of variability を認め, 33週2日, 胎児脳室拡大, 羊水過多がみられ, late deceleration も出現したため, 帝王切開にて分娩となった. 新生児経過: 2370g の男児で, Apgar score は1点 (1分) 5点 (5分), 気管内挿管, 人工肺サーファクタント投与後, 当院へ搬送された. 入院時より, 肝脾腫, 黄疸, 出血斑, 脳室拡大, 肺炎が認められ, 血小板数2.6万, GOT 2422, GPT 393, LDH 16280, 直接ビリルビン値10.1, CMV-IgM1.87で, gan を開始したところ, 肺炎と肝機能は改善傾向がみられた. その後, 肺炎悪化のたびに gan を使用したが, 効果は認められていた. 経腸栄養も確立し, 比較的安定した状態と思われたが, 87生日, 急激なヘモグロビン値の低下, 代謝性アシドーシス, 高 K⁺血症, 肝機能悪化, DIC, フェリチンの増加を認め, 治療に反応しないまま88生日に死亡した. 剖検にて, 脾臓に著明な血球貪食像を認め, ウイルス関連性血球貪食症候群 (VAHS) が示唆された. **考察:** CMV 胎内感染症に対しても, VAHS を考慮した治療計画が必要と思われた.

P-434 抗 HIV 剤長期投与に伴う男性 HIV キャリアの精液性状の変化

和歌山県立医大紀北分院

垣本和宏, 大寶護侍, 玄 裕之, 安藤良弥

【目的】HIV は性行為により感染する一つのウイルスとして知られているが, 男性が HIV キャリアで女性が非キャリアである夫婦で挙児希望の際にどのように対応するのにについての明確な指針はない. われわれは, HIV キャリア精液より HIV 除去精子の回収方法とともに, 長期に抗 HIV 剤の投与を受けている HIV キャリアにおける精液性状の変化ならびに受精能についての検討した. 【方法】キャリア (6例) の同意のもと, 精液の提供を受け, 精液性状の分析, 精漿中 HIV RNA 量, 多層 Percoll 密度勾配法により分離した精子分画中の HIV RNA, 分離した精子の受精能に関しては Hypoosmotic swelling test (HST) を用いて検討した. 【成績】1. 核酸系逆転写阻害剤と Protease 阻害剤の投与中のキャリアでは, 精子数の減少 ($1200 \pm 400 \times 10^4$ /ml) と運動率の低下 ($37 \pm 15\%$) が認められた. 2. 非核酸系逆転写酵素阻害剤と Protease 阻害剤の投与に変更されたキャリアでは精子数 ($1800 \pm 500 \times 10^4$ /ml), 運動率 ($45 \pm 20\%$) と改善傾向を認めた. 3. 精漿中 HIV RNA は血中 HIV RNA と相関し検出できない症例も存在した. 4. 密度勾配により分離した精子分画からは HIV RNA は検出限界 (4copy/ml) 以下であった. 5. 精子の受精能は, 回収された運動精子においては抗 HIV 剤による差異は認めなかった. 【結論】HIV キャリア男性の精液性状は, 投与されている抗 HIV 剤の種類により異なる影響を受ける事が判明した. また, 回収された精子分画からは HIV は検出限界以下であり, HST からは精子の受精能にも変化は認められなかったことから ART に供することも可能であると考えられる.

15
日
(火)
ポ
ス
タ
ー**P-435 NRAMP1 (Natural Resistance-Associated Macrophage Protein 1) 遺伝子とクラミジア・トラコマティス (C) 感染との関連**山口・済生会下関総合病院¹, 山口大遺伝子実験施設²田村博史¹, 岸 文雄², 石松正也¹, 高崎彰久¹, 森岡 均¹

【目的】NRAMP1はマクロファージ特異的に発現し, 自然抵抗性を担う機能分子である. 近年, 細胞内寄生性病原体に対する感受性と NRAMP1の関連が明らかになり, NRAMP1プロモーターの3種の多型性 (A1, A2, A3) では A1対立遺伝子に発現レベル低下による易感染性が予想された. 今回, 細胞内寄生性細菌である C に注目し, NRAMP1遺伝子との関連を検討した. 【方法】当院を受診した130例 (妊婦67例, 不妊患者63例) を対象とした. 遺伝子の収集に関しては, 医薬品等治験・臨床研究審査委員会に審査承認を得た上で検体提供者の同意のもとに研究に供せられた. 検体を用いて NRAMP1対立遺伝子頻度を遺伝子解析した. また, C 抗体価 (IgA, IgG) を EIA 法にて, 子宮頸管内の C 抗原を PCR 法にて測定した. 【成績】NRAMP1プロモーターの対立遺伝子頻度は妊婦では A1 9 (6.7%), A2 30 (22.4%), A3 95 (70.9%), 不妊患者では A1 15 (11.9%), A2 14 (11.1%), A3 97 (77.0%) であり, A1の頻度が不妊患者で高頻度であった. C 陽性例 (抗原あるいは抗体いずれか陽性) は妊婦で23例 (34.3%), 不妊患者で32例 (50.8%) と不妊患者で高い傾向にあった. 不妊患者で子宮卵管造影を施行した28例のうち, 卵管因子 (卵管閉塞・水腫, 卵管周囲癒着) あり8例では A1 5 (31.3%), A2 1 (6.2%), A3 10 (62.5%), 卵管因子なし20例では A1 5 (12.5%), A2 5 (12.5%), A3 30 (75%) と卵管因子ありで A1の頻度が高かった. また, C 陽性例も卵管因子ありで6例 (75%), 卵管因子なしでは9例 (45%) と卵管因子ありで高い傾向にあった. 【結論】不妊患者特に, 卵管因子をもつ症例に NRAMP1の A1対立遺伝子, C 感染が高頻度に認められた. C 感染およびその重症化に NRAMP1の関与が示唆された.